

ピア・サポートプログラムにおける 教育的効果についての予備研究 I

—社会人基礎力への効果の検討—

笹 井 恵 子

要旨

本研究の目的は、正課授業である「総合演習 a・b」において、ピア・サポートプログラムを導入し、その教育効果について検討することである。また効果がみられると予測される因子として社会人基礎力に着目し、「前に進む力（主体性・働きかけ・実行力）」、「考え抜く力（課題発見力・計画力・創造力）」、「チームワークで働く力（発信力・傾聴力・柔軟性・ストレスコントロール力・情報把握力・規律性）」の3因子12項目からなる経済通産省による社会人基礎力（2006）に基づき作成された尺度を Pre-test, post-test として使用し、ピア・サポートプログラムによる教育的効果についての分析を行った。その結果、「主体性」、「課題発見力」、「計画力」、「柔軟性」、「ストレスコントロール力」において、導入時よりも有意な増加が認められた。

キーワード

ピア・サポートプログラム、社会人基礎力、コミュニケーションスキル、他者支援スキル、主体性

1. 問題と目的

「大学全入」時代を迎え、新入生の学力・学習へのモチベーション・目的意識・モラル・価値観などにおける多様化が生じている。そういった中、大学はいかにして多様な新入生を迎え入れ、大学生活に適応させ、社会で生き抜く力を修得させ送り出していくのか、極めて重要な課題である。

文部科学省では、2008年の「学士課程教育の構築に向けて（答申）」（中央教育審議会、2008）、「新たな未来を築くための大学教育の質転換に向けて～生涯学び続け、主体的

に考える力を育成する大学へ〜(答申)」(中央教育審議会、2012)などにおいて、予測困難な時代をよりよく生き抜くために、自らの責務を果たし、他者への配慮をしながら、チームワークやリーダーシップを発揮して、社会的責任を担い、論理的、社会的能力の育成について高等教育段階で培うことを「学士力」の重要な要素として示している。

以上のような状況の中で、ピア・サポートを導入し学生自身を学生支援の取り組みや、正課内の教育、正課外の諸活動、さらには大学教育の運営の参画させ、彼らのモチベーションや学習に取り組む積極的な態度をその相互関係の中で高めていこうとする試みが広がってきている(川島2010、山田2010)。

ピア・サポートとは、「仲間による支援・援助活動」であり、「援助のための訓練を受けた同年代の仲間が、問題に直面した仲間を支援する活動」(Cole, 1999 バーンズ 亀山・矢部, 2002)、また「仲間による対人関係を利用した支援活動の総称」(西山・山本, 2002)である。

こういった仲間支援を活用する考え方は、1904年にアメリカのニューヨークで非行少年に対する支援が始まりである。その後1909年には、Big Brother-Big Sister Program が制度化され、法人組織としてアメリカ全土に広げられた。1947年には日本BBS連盟が設立され、非行少年のメンタルフレンドプログラムとして定着している(西山・山本, 2002)。このような福祉領域での仲間支援活動プログラムが、教育分野で実践されたのは、1965年の“Big Brother-Big Sister Program in a high school”(Vassos, 1971)、1969年の“The Peer Influence Model”(Vriend, 1969)からである。大学での活用は、Murry(1972)による学生間のAdvising Programでの試みが始まりである。日本の大学では、2000年代に入り、ピア・サポート活動における試みが導入されるようになった。

ピア・サポートの実践活動を分類すると、①相談活動(傾聴活動、ピアカウンセリング中心、よりカウンセラー的)、②葛藤調停(コンフリクトレゾリューション、ピア・ミディエーション中心。仲間間での問題解決)、③仲間づくり(バディ活動中心。仲間にいることの保障)、④アシスタント(ピアアシスタント、学校業務の補助、新入生オリエンテーションなどでの案内)、⑤学習支援(ピアチューター中心、教科の得意な生徒が仲間に教える)、⑥指導・助言(ピア・メンター中心、後輩へのアドバ

イス、喫煙・飲酒の撲滅の啓発活動など)、⑦グループリーダー(小集団のグループリーダー、グループカウンセリングの取り仕切りやファシリテーターなど)が挙げられ、状況に合わせて複合的に用いられる場合もある(西山・山本, 2002)。

ピア・サポートの効果としては、非暴力的なコミュニケーションの獲得、信頼感の構築、安心感の提供、尊重し合い交流すること、被支援者による自助力の習得、学力向上、問題解決スキルの習得、自己価値の確認、他者支援スキルの習得、感謝の心、自分、他者、学校、地域に対する態度の向上、自己決定力の向上、対人関係スキルの向上など、幅広い効果が多くの研究により明らかにされている(Fielding, pili & Chambliss, 1999, Hessler, Hollis & Crowe, 1998, scarborough, 1997)。

以上を踏まえ、本学においても、2013年度より「学生間のつながりを深め、学生同士で支え合い高め合う力を促進する」ことを目的にピア・サポートを導入した。

そこで本学におけるピア・サポートプログラムの開発を目的とし、導入1年目の教育効果について検討する。また効果がみられると予測される社会人基礎力に着目し、ピア・サポートプログラムによる教育的効果を分析することも目的とする。

2. 対象と実施方法

1) 研究対象

本学の正課授業である総合演習を受講した学生(8名:男子6名、女子2名)

2) プログラムの開発および実践者

筆者

3) 実施期間

実施期間は、2013年4月9日から2014年1月21日である。

4) プログラムの達成目標

- ①他者への共感性をもてるコミュニケーションスキルを身につけること。
- ②課題解決や対立解消といった他者支援スキルを身につけること。
- ③実践活動から成果や課題を振り返り、さらなるスキルの獲得や活動を目指し、主体的に行動する力をつけること。

5) プログラムの内容

プログラムの内容は、学内研修（正課授業、共通教育科目「総合演習 a・b」:表1）・学内実践活動（表2）、学外活動（表3）で構成している。

6) 質問紙

学生の成長に焦点をあて検討するため、経済通産省による社会人基礎力（2006）に基づき作成された質問紙を事前4月9日、事後1月21日に実施した。

社会人基礎力は「職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力」として定義されている（経済通産省、2006）。下位因子は、前に進む力（主体性・働きかけ・実行力）、考え抜く力（課題発見力・計画力・創造力）、チームワークで働く力（発信力・傾聴力・柔軟性・ストレスコントロール力・情報把握力・規律性）の3因子12項目からなる。1全く当てはまらない～5非常によく当てはまる」の5件法で回答を求めた。

3. 結果と考察

1) 学内研修

学内研修は、日本ピア・サポート学会ピア・サポーター認定要件を参考に、以下の内容で実施された。

表1 学内研修概要

研修内容	時間数
ピア・サポート概論	3時間
自己理解・他者理解/動機づけ	4.5時間
コミュニケーション・スキル	4.5時間
問題の解決	6時間
対立の解消（いじめ予防・メディエーション）	6時間
ストレスマネジメント	1.5時間
ピア・サポート活動の心得	1.5時間
ピア・サポート活動計画作成	13.5時間
活動の評価/スーパービジョン	4.5時間

2) 学内実践活動

学内でのピア・サポート活動として、オープンキャンパス、経法祭、ティ・アワー、入学前教育の一環である経法プレ講座を実施した(表2)。

オープンキャンパス企画では、「高校生へのメッセージ」というテーマを受講生に与えた。受講生たちはグループに分かれ、与えられたテーマを基にKJ法により各グループのテーマを決定し、企画書を作成した。次にロールプレイやグループワークの実施なども含め、具体的な内容を吟味し、パワーポイントでのプレゼンテーションの資料や、実践の効果をを得るためのアンケートを作成した。その後、それぞれの受講生たちは、自分の能力や課題に合わせ、受付、発表者、発表者の緊張を和らげるためのメッセージプレート担当者、ファシリテーターなど当日の役割を分担し、実践に向けたトレーニングを行い、発表の完成度を高めた。実践後は、アンケートの集計結果を参考に、集団スーパーバイズを行い、オープンキャンパスでの成果と課題について話し合った。

経法祭、ティ・アワー(図7)に関しては、ピア・サポートに興味のある学生の参加も認め、授業外を利用した定期的な企画会議により、関わりをテーマに企画・運営を行った。総合演習受講生だけに限定せず活動したことで、学年を越えた繋がりをさらに深めたとともに、ピア・サポートを知らなかった学生たちへの周知が広がった。

経法プレセミナー参加スタッフ研修では、プレセミナーを支える一年生を対象に、「傾聴のスキル」を提供するために、研修プログラムを企画・実施した。研修のロールプレイで使用するカード、研修の効果を検討するためのアンケートを作成し、進行、ロールプレイ、ファシリテーターなどの担当に別れ、当日に向けたトレーニングを含め、準備を行った。研修は3日間実施され、学生たちは、その都度、成果と課題についてともに考え、解決策を模索しながら研修を実施したことで、それぞれの学生たちは研修の目的に応じたアクションが可能となり、さらに協働が機能していくようになった。

3) 学外活動

他大学のピア・サポート活動や、ピア・サポート活動の実際に触れるため、日本ピア・サポート学会大阪支部大学生部会の活動に、積極的に参加した(表3)。

「大学生のためのピア・サポーター資格講座」では、学生たちはピア・サポートに

表2 2013年度学内実践活動内容

日程	内容
9月7日	オープンキャンパス ～大学生からのメッセージ～ 「高校生と大学生でアイスブレイキング：経済学と法学のススメ」 「学生生活をベースの教職課程の説明・ゼミの説明～時間割作成してみよう」
5月20日	ティ・アワー ～交流を楽しもう～
6月5日	
6月17日	
7月1日	
10月28日	ティ・アワー：ハロウィンパーティー
11月9・10日	経法祭～巨大迷路～
11月25日	ティ・アワー：クリスマスデコレーションを楽しもう
12月9・10・12日	経法プレセミナー参加スタッフ研修「アクティブリスニング」
12月21日	経法プレセミナー「コミュニケーションゲーム」
12月17日	ティ・アワー：クリスマスパーティー

関する基礎知識を深め、他大学の学生たちと交流する中で、積極的に発表し、グループワークではリーダーシップを発揮する学生もあり、主体的に学び、活動する姿を見ることができた。

小学生から高校生までを対象とした「ピア・サポーター育成講座」では、大阪市内の教員の方々、他大学の学生とともに、講座の支援を行った。幅広い年齢層、大学を超えた交流を経験する中で、ピア・サポートの実際の活動に触れ、学生たちの視野はさらに広がった。

日本ピア・サポート学会第12回大会では、初めて学会発表の経験をし、他大学のピア・サポーターたちと交流し、互いに活動報告を行った。この活動においても本学の多くの学生たちは、グループワークでリーダーを担い、また大会運営のボランティアスタッフにも初挑戦し、さまざまな状況に柔軟に対応し、多くの参加者の方々と触れ合った。大会最後の理事会では、大学生部会の代表として活動報告する機会を得、学生たちは大きな評価を受けた。

これらの活動により学生たちは、ピア・サポートスキルを磨くとともに、仲間同士

での助け合いや協働することの実際に触れ、学内活動の参考となる貴重な経験を得ることができた。

表3 2013年度学外活動

日程	活動内容
8月4日	日本ピア・サポート学会大阪支部 「大学生部会 研修&ミーティング」
8月12日	ピア・サポーター育成講座 大阪教育委員会 大阪市教育センター主催
10月12日～10月14日	日本ピア・サポート学会 第12回大会 発表 12日～13日：ボランティア活動 14日：大学生部会交流会 研究発表：「大学生によるピア・サポートの試み」

4) 学生の学び

一年間のプログラムを通して、学生たちが、ピア・サポートをどのように捉えて理解したのかについて、学生に最終レポートを課した。そのレポートの内容について、本プログラムの達成目標である「コミュニケーションスキル」、「他者支援スキル」、「主体性」に関連する記述を抽出し、表4にまとめた。

まず「コミュニケーションスキル」については、トレーニングにより傾聴スキルや自己表現のスキルを得たことで、本来コミュニケーションが苦手な学生も、また友好的な学生においても、他者を尊重して聴く姿勢を大切にすることができ、以前より良好な繋がりを形成できたことを実感している。以上より、学生たちのコミュニケーションスキルは、実施前より向上したといえるであろう。

次に「他者支援スキル」については、守秘義務の厳守とともに支援の限界を知ったこと、さまざまな価値観をもつ他者が存在し、関係を築くこと、心に寄り添い共感すること、被支援者の自助力を引き出し、課題解決へのサポートをすることへの手応えなどが学生のレポートの中で記されている。このことから「他者支援スキル」についても、学生たちはそれぞれの視点を持ち、身に付けたといえる。

最後に「主体性」については、学生の記述内容より、成果や課題を振り返り、自分には何が足りないのか、自身の役割や企画自体に求められていることを果たせたのか

と模索している姿勢が挙げられている。そして学生たちは、失敗から自分にとって必要となるスキルに気づき、学んでいこうとする姿勢が伺え、今後、主体的に行動する力を発揮していきたいという思いが多く記載されている。以上より「主体性」に関しても、効果があったといえる。

以上から、本プログラムにおける達成目標に、それぞれの学生は辿り着くことができたといえるであろう。

表4 最終レポートによる記述内容

id	コミュニケーションスキル	他者支援スキル	主体性
1.	コミュニケーションをとることが苦手な自分であっても、FELORの知識があることで、コミュニケーションをとることができたと思える	高校生にもさまざまな考えを持っていると思うため、一人一人に合わせながら、かつ、互いに共感し合いながら説明することが必要だと思えた。	企画の成果や課題について考え、活動の評価をその都度行い、よかった場合と悪かった場合を比較し、悪い点を改善するためには、どのようにすればよいのかを考える力がついた。
2.	相手の感情や気持ちを大切に話した話の聴き方を身につけることができた。いかに話し手の気持ちをくみ取るかを考えられるようになった。	プラスのストロークを送ることで、相手の存在や価値観を認め、よりよい関係を築くことができる。	もっとこのピア・サポートが広がり、学内で主要な活動の一つとなれば良いと思う。そのため何ができるかを考え、悩み、模索し、実現したい。
3.	再度確認することで、また新たな気持ちで話の引き出し方に磨きをかけることができたように思う。	どこからが守秘義務にあたるのかがわかってよかった。相談者の状況を十分に理解し、気持ちに寄り添い共感したい。	学生たちみんなが、大学になじみやすいような集まりといった企画を実施することにより、学生間のつながりを深め、安心して互いに成長していける環境を提供していきたい
4.	自分が相手に関心を持ち、自分が心を開くことで、相手も心を開いてくれることがあるということを実感しました。	現在は相談者に、今できることから考えてもらい、スモールステップで自分なりの方法を引き出せるようになってきていると感じています。	このピア・サポートで得たスキルを後輩達に継承することである。特に先輩学生と後輩との交流の場であるメンターアワー、及び就職活動についてのサポートを行うキャリアメンターで発揮していきたいです。

5.	<p>様々な立場、考え方の人がいるのだから、自分と他の人の考え方が違うことも大切なことだと考えられるようになった。</p>	<p>相手の話を聴くことに徹して、「こうしたらうまくいくのに」と思っても、できる限り相談者が自ら気付けるよう支えることにした。</p>	<p>卒業するまでに後輩たちにできるだけ多くのピアのスキルを伝えていくとともに、一般の学生たちにも大学でのピア・サポート活動がどのようなものか理解してもらい、ピアの輪をもっと広げていきたい</p>
6.	<p>今では、意識せずに自然とFELORを行っている、相手と向き合って話をするようになったと思う。</p>	<p>どうすれば、もっと自分も相手も納得ができる落ち着いた話し合いができるのだろう。いつもそれが悩みの種であったため、このスキルを知り、学ぶことができたので、解決の糸口を得ることができたと思う。</p>	<p>中学校・高等学校の活動では、他の先生方が子どもたちに話しかけ、サポートする様子を実際に見て、それを参考にしながら私なりに子どもたちの立場にたって積極的に接することができたと思う。</p>
7.	<p>傾きや相槌の仕方やタイミングによって、「もっと話したい」と感じるのか、或いは、「もう話をするのはやめておこうかな」と気持ちが変わるなど、その重要性を実感することができた。</p>	<p>周囲との協調性を高め、個々の特徴や長所を把握しつつ、自分の長所を生かして、活動をサポートする力を得ることができたように思う。</p>	<p>グループワークやワークショップに参加する機会が多くなったことで、「自分に今何を求められているか」ということを常に考えるようになった。</p>
8.	<p>FELORを試していくうちに、自然と相手の話を傾聴する時に、目を合わせることでできるようになった。自分の考えを話していくことや、今までより短期間で交友を広げていくことができ、学んできたピア・サポートスキルの効果を感じることができた。</p>	<p>私は高校生たちの意見を上手くまとめ、サポートすることができた。</p>	<p>問題点を自分で見つけていき、どこがどう悪かったのか、どう改善していけばうまく相手に伝えたり、聴いてもらえるのかを、自分なりに考えて工夫していくことができるようになった。</p>

5) 「社会人基礎力」 Pre-test, post-test の得点比較

「社会人基礎力」Pre-test, post-test の得点比較について、t 検定を行った。その結果、有意差が認められた因子は、主体性 ($t(7) = 3.42, p < .05$)、課題発見力 ($t(7) = 4.97, p < .01$)、計画力 ($t(7) = 3.86, p < .01$)、発信力 ($t(7) = 2.76, p < .05$)、柔軟性 ($t(7) = 3.86, p < .01$)、ストレスコントロール力 ($t(7) = 2.97, p < .001$) であった (表5)。

以上の結果は、ピア・サポート活動を実施する中で、それぞれの学生たちが担当した役割において、主体性をもってやり遂げることに、常に課題を見出し、次の企画へとつなげ、様々な問題が生じてくる中で柔軟に関わる機会を経験し、力をつけてきたことを示している。またこれら主体性、課題発見力、計画力、発信力、柔軟性、ストレスコントロール力は、ピア・サポート活動を維持していくためにも重要なスキルである。

「働きかけ」「実行力」「創造力」「傾聴力」「情報把握力」においては、得点の向上は見られたものの有意な結果は得られなかった。この結果はピア・サポート活動を実践する上で、常に課題となった点である。一つは多くの大学生に見られる「指示があれば忠実に動けるが、自分から動くことができない」という傾向である。学生たちは、テーマや環境を与えられていない状況で、「新しい企画を生み出していくこと」、集客数を得られなかった現状から「ピア・サポート活動を知らない学生へいかに働きかけていくのか」、自ら得たスキルを実践の中で「いかに生かしていくのか」について、大いに悩み、議論を重ねつつも、なかなか答えを見出すことができずに、一進一退を繰り返した。さらにトレーニングにより得たスキルについて、実践の中で自身の実感は得られたものの、実際に「どれぐらい耳を傾けることができたのか」、「話の内容を深め、いかに思いを引き出せたのか」など、具体的に他者支援に関する客観的な効果についての結果を収集し、把握できなかった点も挙げられる。

一方「規律性」においては、得点が低下していることが明らかとなった。ピア・サポート活動に参加する学生には、前向きに取り組む学生が多くいる中で、コミュニケーションへの苦手意識を克服しようと躓いてしまう学生や、慣れから甘えが生じ、人任せになる学生も存在した。こういった状況から学生間で葛藤が生じた結果であると考えられる。規律性を維持し、いかに学生たちのモチベーションを引き出していくかについては、今後も課題となる点である。

ピア・サポートの授業を受講した学生を対象に、社会人基礎力について検討した山田らによる研究結果では、得点上の変化は見られたものの、有意な結果は得られなかったという（山田ら, 2011）。この山田らの研究結果と比較してみると、本プログラムでは、トレーニングだけでなく、実践活動も加え「練習」→「計画」→「活動」→「振り返り」のサイクルを繰り返して実施してきたこと、半学期ではなく、通年の授業として位置づけ、じっくりと実施したことで効果を得ることができたのではないかと見える。

以上より、本分析結果は、ピア・サポートプログラムにおいて、ねらいを設定し、トレーニングをし、サポート活動計画を立て、実際にサポート活動を実施し、仲間とともにうまくいったことなどを共有し、課題になったことを仲間とともに解決していくことが、さらなるスキルの獲得を促すこと、特に振り返りを大切にすることが、学生の成長を促進させることを証明したといえる。また活動を重ねていく中で、仲間と助け合い、繋がりを形成していくことが、ストレスコントロール力を高めるといえることが示唆された点も注目すべきある。

表5 社会人基礎力の結果 (N=8)

下位項目		事前 M (SD)	事後 M (SD)	T 値 (df)
前に踏み出す力	主体性	3.13 (1.13)	3.75 (1.28)	3.42 (7) *
	働きかけ	3.00 (1.51)	3.63 (1.60)	1.67 (7)
	実行力	3.88 (0.64)	3.88 (1.13)	0.00 (7)
考え抜く力	課題発見力	3.00 (0.93)	4.13 (0.64)	4.97 (7) **
	計画力	3.25 (0.89)	4.13 (0.64)	3.86 (7) **
	創造力	3.00 (1.20)	3.75 (1.17)	1.66 (7)
チームワークで働く力	発信力	2.50 (1.41)	3.75 (1.04)	2.76 (7) *
	傾聴力	4.00 (0.76)	4.38 (0.74)	1.43 (7)
	柔軟性	3.38 (0.52)	4.25 (0.71)	3.86 (7) **
	ストレスコントロール力	3.00 (1.31)	3.88 (1.46)	2.97 (7) *
	情報把握力	3.50 (1.07)	4.38 (0.52)	2.21 (7)
	規律性	4.38 (0.92)	4.25 (1.04)	0.28 (7)

P<.001***、P<.01**、P<.05*

4. まとめ

本研究結果により、これまでピア・サポートトレーニングを受けた学生についての研究報告が少ない中、ピア・サポートプログラムによる教育的効果が明らかとなった。具体的には、「練習」→「計画」→「活動」→「振り返り」を積み重ねることが、学生たちに対話の楽しさ、通いあうことの嬉しさを実感させ、主体性、課題発見力、計画力、発信力、柔軟性、ストレスコントロール力といった社会人基礎力の向上に効果をもたらしたといえる。

ピア・サポート活動を経験することは、支援や学生生活を肯定的に捉える事を促進させ、自己理解と対人的態度が改善するといった研究結果もある（有馬, 2010）。今後もサポート活動を継続していくことで、学生たちのネットワークを発展させ、個々のソーシャルスキルの向上を促し、大学生の不登学や引きこもりなど不適應を解消する効果も期待される。

一方、実施者としての反省点は、ピア・サポート活動を実施する中で、学生たちが受動的になってしまう様子が感じられることもあった点である。ピア・サポートは学生たちの主体性を重んじ、トップダウン的な活動でないことは言うまでもない（有馬, 2010）が、ピア・サポートの定義（日本ピア・サポート学会）にあるように、ピア・サポートを導入していく上では、教職員の指導・援助の元で進めていくこと、つまり教員である筆者の働きかけが、サポート活動を継続していくためには必要であった。今回は設定された環境下ではあったものの、学生たちがそれぞれの立場からニーズを感じ取り、積極的に取り組もうとする姿勢から主体性において優位な結果を生むことができたが、自ら考え、動いていく意味での主体性にはまだ辿り着いたとはいえない。今後、いかに学生たちの主体性を育み、学生たちで作り上げるサポート活動を充実させ、定着させていくことができるのが課題となる。そのためには教職員の関わりを含め、システムの検討も必要である。

一方、特に実施者として効果を感じた点は、コミュニケーションを苦手としていた学生の大きいなる成長である。これはピア・サポートの理念である「同質の関係性における相互支援」（川島・後藤, 2014）、つまり活動を進めていくうちに、関わることに苦手意識をもつ学生も、対等な立場で支援者・被支援者の役割を常に交代することで、

「支え・支えられる」という関係性を実感し、形成していった結果であるといえる。

以上、ピア・サポートプログラムにより、学生たちは仲間とコミュニケーションを交わし、新しい自分を発見し、互いに人間関係形成力を引き出し合い、自己肯定感や他者理解、自己分析を行った。特に実践活動は学生たちに身に付いたスキルを発揮する機会となり、自分に足りないスキルに気づかせ、さらに学んでいきたいという意欲を芽生えさせた。

本研究結果を踏まえ、ピア・サポートプログラムを開発し充実させていくことは、助け合う風土を築きあげ、学生たちの主体性を育む。その結果、学生自身のステップアップを促し、流動する社会の中で生き抜く力となりうる。これこそがピア・サポートの大きな役割である。

ピア・サポートは、教員を志望する学生のカウンセリングマインドの育成や、ドロップアウトをはじめ多様化する学生たちの抱える問題への解決策にも及ぶ大いなる可能性を秘めている。そのためにも本研究結果における課題点を、一つひとつ検討しピア・サポートプログラムを開発していくことが必要である。

引用文献

- 有馬比呂志 「中学生における自発的ピア・サポートが自己成長に及ぼす効果」 学校メンタルヘルス 2010 Vol.13, No.1 : 35-40頁
- Fielding,S., pili,C & Chambliss, C Promoting awareness of a high school peer helping program, (Ursinus College) ERIC Document Reproduction Service No. ED419192 1999
- 早坂浩志 学生に向けた活動2-授業以外の取組 日本学生相談学会50周年記念誌編集委員会 学生相談ハンドブック 2010 185-201頁
- 川島啓二 「大学教育革新とFDの新展開」 国立政策研究所紀要 2010 139, 9~20頁
- 川島一晃・後藤綾文 「学内フィールドから学ぶ「連携」の形-ピア・サポート実践の事例から- 三重大学共通教育センター 大学教育研究-三重大学授業研究交流誌- 第22号別冊 2014 105-109頁
- 文部科学省中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」答申 2008
- Murry, J.P. "The comparative effectiveness of student and faculty advising programs, Journal of College Student Personnel, 13, 562-566, 1972
- 西山久子・山本力 「実践的ピアサポートおよび仲間支援活動の背景と動向-ピアサポート/仲間支援活動の起源から現在まで-」 岡山大学教育実践総合センター紀要 第2巻 2002 81-93頁
- 小貫友紀子 「米国学生支援における学習者中心主義への転換要因へのアセスメントのインパクトについて」 名古屋高等教育研究 第4号 2014年 97-116頁

ピア・サポートプログラムにおける教育的効果についての予備研究Ⅰ（笹井）

scarborough, J.L. The SOS Club: A practical peer helper program, Professional School Counseling 1 p.25 1997

杉谷乃百合 「[調査報告]東京基督教大学における自己調整学習理論に基づく学習支援の取り組み」 キリストと世界 第25号 184-189頁 2015

山田剛史 「ピア・サポートによって拓かれる大学教育の新たな可能性」 大学と学生 2010.11. 6-15頁

山田嘉徳・村上祐介・河崎俊博・押江隆・田中俊也 「ピア・サポート活動が大学生のもたらす効果の検討」 日本心理学会75回大会 2011. 1167頁

Vassos, S.T. "The utilization of peer influence", The school Counselor, 209-214, 1971

Vriend, T.J. "The peer influence model in counseling", Educational Technology, 9, 3, 50-51, 1969